「神人の道」を一人ひとりの生活に

神人あいよかけよの生活運動

願い

御取次を願い 頂き
神のおかげにめざめ
お礼と喜びの生活をすすめ
神心となって 人を祈り 助け 導き
神人の道を現そう

KONKOKYO
金光教

神人あいよかけよの
生活運動パンフレットⅢ

KONKOKYO

直信が語るお礼と喜びの生活

目次

はじめに　1

直信が語るお礼と喜びの生活　5

桂松平師が頂いたみ教えから　6

佐藤照師のお取次から　12

近藤藤守師のお話から　18

三代金光様のご信心から　23

おわりに　27

はじめに

教祖様にはじまる取次の業を今日に具現される教主金光様（金光平輝様・五代金光様）は、立教百五十年（平成二十一年）のお年柄に、「神人の道」とのお言葉をお示しくださいました。そのおぼしめしを頂くなかで、「神人あいよかけよの生活運動」が発足しました。

この「運動」で願われているのは、「神も助かり、氏子も立ち行き」と神様が仰せられる「神人の道」が、一人ひとりの生活に現されていくことです。そのために大切なこととして、教主金光様は、「世話になるすべてにお礼を言うことです」とお示しくださいました。

このお言葉は、「実意をこめてすべてを大切に」「世話になるすべてに礼を言ふ心」と仰せられて、お礼を土台にした生き方を求め現された四代金光様（金光鑑太郎様）のご信心を頂かれ、教主金光様ご自身が親様のお姿そのままに、日々稽古を進めておられるご内容をもってお示しくださったものです。さらには、「神人の道」を求め現していく信心実践を端的に表現されたお言葉でもありましょう。

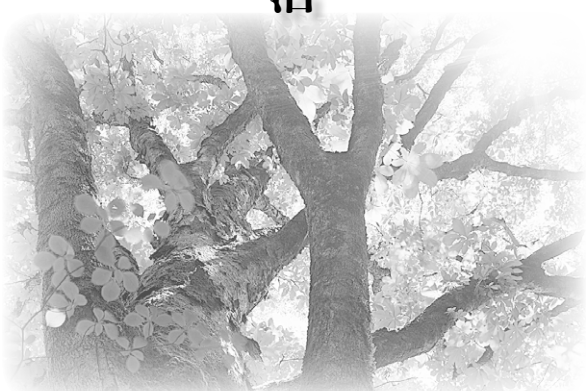
そのことに関わって、教祖様のみ教えに、

「みんな、病気の名や病気のもとは不思議によく知っておるが、おかげの受けられるもとを知らぬわい。病気のもとよりは、おかげのもとをたずねてみよ」

とあります。

「おかげのもと」と仰せられる内容は、「助かりのもと」という意味でしょう。そこで、ここから「おかげのもとをたずねてみよ」と仰せられる内容を、直信が語る信心から求めていきます。

直信が語るお礼と喜びの生活



桂松平師が頂いたみ教えから

桂松平師（福岡県小倉教会初代）は、教祖様最晩年の明治十六年、二十七歳の時にご霊地へ初めて参拝しました。当時、周防（山口県）で行商をしていた師は、念願であったご霊地参拝がかない、その喜びをもって教祖様にお取次を願いました。教祖様は師の話に無言のままうなずかれ、やがて静かにご神前に進み、柏手を打たれるやいなや、

「氏子、水が毒、水が毒というが、水を毒と思うな。水は薬という気になれ。水を薬という気になれば、腹の病はさせはせぬ」

と伝えられ、続いて、

「氏子、水あたりということを言うなよ。水がなくては、一日も暮らせまい。大地は何とある。みな、水がもと。稲の一穂も五合の水をもって締め固めるというではないか。水の恩を知れよ」

と仰せられたのです。

当初、師はあっけにとられながらも、教祖様のお言葉に、自分

がこれまで水を敵（かたき）のように思っていた事に気がつきました。生水や食物に常に気を配る両親に育てられ、大病（胃がん）の時には自分でも食養生に努め、とくに仕事柄、行商に出ると、その土地の水に細かく気を遣ってきたのです。それは、わが身を守るために当然の事であり、「水の恩」など思いもしなかったのです。

師は教祖様の教えをとおして、過去のあり方、自分の心得違いに気づかされ、水の恵みを受けなければ生きられない人の身である事に得心し、以来、「水の恩」という教えは、師が生涯求めとおし、自分と天地の恵み、自分と神様との間柄を問うものとなったのです。

＊　＊　＊

桂松平師の弟子の一人である安武松太郎（やすたけまつたろう）師（福岡県甘木教会初代）は、初参拝の時、桂師から、

「これまで、天の恩を知る者はないでもなかったが、地の恩を知る者がなかった。これからは天地の恩を知れよ。天は父であり地は母である。天の恩を知って地の恩を知らぬは、父あるを知って

母あるを知らぬと同様である。天地の恩を知って、天地金乃神と拝め」

と諭されました。

　このお取次を頂いて、安武師は、

「なるほど、人間の生活は地の恩徳なくしては一日も成り立たない。これまで天に向かっては拝礼をしていたが、地の大恩に対しては一言のお礼を言ったこともない」

と思い、それまでの自分の生き方を問わされ、教会からの帰り道、地面を歩く一歩一歩が、「お母さんのお体の上を歩いているようで、もったいないという気がした」と伝えています。そして、恩を知り恩に報いる、お礼と喜びの生活が始まると、二十日後には七年間苦しんだ二つの病気が全快するおかげを頂いたのです。

　このように、桂師は教祖様のお取次によって、「水のご恩」にめざめられ、安武師は桂師のお取次を頂いて、「地のご恩」にめざめられて、助かりへと導かれていったのです。

佐藤照師のお取次から

大正十五年秋、かつて医師も手を放した病を助けられた婦人が、三キロ余りの山坂を越えて芸備教会のお広前に参拝してきました。この婦人は、夫が病身で養生をしているなか、長男を病気で亡くし、佐藤照師（広島県芸備教会初代・佐藤範雄師婦人）が座るお結界の前で、たまらず泣き崩れました。婦人が泣き止むのをじっと待った後、照師はその婦人にこう話しました。

「つらいなあ。あんたのつらいこと、途方に暮れておることは、よく分かる。神様もようご存知じゃ。あのなあ、これからはつらいことや、悲しいこと、途方に暮れたことは、一切言うて来んでよろしい。神様はようご存知。私もご祈念しておるから。きょうからは嬉しいこと、楽しいことを聞かせてくれよ。それを待っておるからなあ」

その婦人は、「私の気持ちを分かって下さらん先生じゃなあ」と泣く泣く家路につきました。それでも、師の言葉を思いながら

帰る道すがら、婦人の心にある思いが、命の奥底から湧き上がってきたのです。

「なるほど、幼い頃、医師から手を放された私が、こうして今、子の親になっている。病気といっても、私を待ってくれている主人がいる。それを、私は今まで一遍もお礼を申したことがない。教会へお参りしては、『助けて下さい。お願いします』と、お願いばかり言う私であった」と思わされ、その場に座って教会の方へ向き直り、「本当に今日まで、ようもようも助けて頂きました。

ありがとうございます」と、初めてお礼を申し上げたのです。

以来、婦人は、「今度お参りする時には、先生に何を喜んでもらおうか」という思いで生活をするようになり、そんな婦人に照師は後年、こう話しています。

「あんたは、あんたの一番つらい、一番途方に暮れておるどん底の時に、私が教えたその教えを、あんたは守り通す。あのなあ、針ほどのことを棒ほどに喜ぶ者は、棒ほどのおかげを頂く。棒ほどのことを針ほどにしか喜ばん者は、針ほどのおかげしかよう受

けん。しかし、あんたはいつでも、針ほどのことを棒ほどに喜んでお礼を言う。あんたはおかげを頂く。あんたの代でおかげをよう受けなんだら、子の代で、子の代でようおかげを頂かなんだら、孫の代で、必ずおかげが頂けるからなあ。それを楽しみに信心してくれよ」

照師は、わが子を亡くした婦人の悲しみに寄り添いながら、「あんたのつらさは神様もよく分かっている」と諭され、そのうえで、「嬉しいこと、楽しいことを聞かせてくれよ」と、お礼と喜びの生活へ、おかげの頂ける信心へと導いていったのです。

近藤藤守師のお話から

近藤藤守師（大阪府難波教会初代）は、「神様のお心」と「信心生活」について、次のように話しています。

＊　＊　＊

信心する者は、その口「喜び」を語り、その耳「喜び」を聞き、その行いすべて「喜び」の行いでなければならない。つまり、毎日信心の喜びに起き、信心の喜びを行い、信心の喜びに寝るのである。

ご神前へ向かっても、内心の喜ばしさが胸に込み上げてきて、お礼の数々も申し上げられない。ましてや、お願い事なども口の端へ上らない。ただ何となくありがたくなってきて、胸がふさがるように感じ、目からは熱い涙がほろりと落ちる。こうなってこなければならない。

たとえ、お願い事があっても、ただ何ともありがたくてたまらないので、そのようなことも忘れてしまう。おかげが頂けようが

頂けまいが、かまうことはない、というような気になってくる。ここにおいて根本の信心ができるのである。喜んでさえおれば、別にあらためてお願いしなくても、お助けをこうむることができるのである。わたしがこういう場合に臨んだとき詠んだのが、次の歌である。

喜びに喜ぶ心見そなわし導き給ふ金光（かねみつ）の神

とにかく、親神様は、氏子をどうにかして救ってやろうとのおぼしめしをもって、天地を一目に見ておられるのである。別に、あれこれとお願いしなくても、氏子の身の上は細大漏らさずご存じのはずである。こちらが、そのおぼしめしを受ける器さえ備えていれば、いつでもおかげは受けられるのである。

その器というのは、ほかでもない。この喜びの心一つだけなのである。神様のご恩ありがたし、おぼしめしかたじけなしと喜びに喜べば、受けるおかげもまた限りがないのである。

＊　＊　＊

お礼と喜びの心が限りないおかげを受ける器を育てていく、というこのお話は、桂松平師、佐藤照師のお話にも通じる助かりへの道標（みちしるべ）ともいえるでしょう。

三代金光様のご信心から

十四歳で本部広前のお結界にお座りになり、七十年の長きにわたって、御取次のご用をお勤めくださった三代金光様（金光攝胤様）は、明治三十六年、二十四歳の時、大阪教会と難波教会に立ち寄られ、乞われてご挨拶をされました。その時、

「信心する者とせぬ者とは、親のある子とない子ほど違う。信心する者は一生死ぬことがない親様にもたれて、信心せよ」

と仰せになりました。

ある先師は、この三代金光様のお言葉について、「『親のある子とない子ほどちがう』と仰っているが、そもそも、この世に生を受けている以上、親のない子はいないはずである。それにもかかわらず、こう仰っているのは、どういうことなのか」と求め続け、ある時、ご祈念のなかでふと、「ああ、子が親の恩を知ったとき、初めて親が親となる。子が恩を知らなければ、親は親としての働きを現せない。なるほど、信心する者とせぬ者との違いは、天地の親神様の恩を知っているか、知らないかの違いがある」と気づかせられ、そこから、この道の信心の尊さ、ありがたさが次第に

おわりに

開かれてきたのです。

三代金光様は、「ありがたい、ありがたいとばかり思う人には、ありがたいことばかりできてきます」と仰っています。このお言葉は、三代金光様ご自身が、親様のみ教えを頂かれて、「神の氏子」として生きることに実意を込められ、ご確認された内容を、そのままお示しになられたものと頂きます。

今日の社会に目を向けると、神の氏子である人間本来の姿を見失い、わが力で生きている、人間の力でやっていけると過信するところから、世話になる心やお礼の心を忘れ、わが心でわが身を苦しめ、そこから、さらなる難儀が生み出されていく状況が見えてきます。そのような現代の様相は、怒りや憎しみ、苦しみといった心が容易に伝播（でんぱ）していくように、私たち一人ひとりの身の回りを取り巻いています。

この「神人あいよかけよの生活運動」では、信奉者一人ひとりが、御取次を願い、頂くことから、今日まで当たり前に思ってきたこと、気づかずに通り過ぎてきたことのなかにある、神様のお心とお働きに気づいていくことが願われています。それは、神様のおかげのなかにある自分の姿を知って、お礼と喜びの生活が始まり、そのことがさらなるおかげの扉を開くことにつながっていくのです。

お礼の心は喜びを生み、喜びはさらにお礼の心を生みます。そのお礼と喜びの心を土台にして、周囲の人々を祈り、助け、導き、

次世代を担う人たちに確かな生き方を伝えていくことが願われています。

教祖様ご生誕二百年の年をお迎えし、教祖様、歴代金光様、お道の先人たちがその身と心をもって求め現し続けられた「神人の道」を、今に受け継ぐ私たちが、「世話になるすべてにお礼を言うこと」を稽古し、生活のなかに現していくおかげを蒙ってまいりたいと存じます。

編集／発行■金光教本部教庁

〒719-0111 岡山県浅口市金光町大谷320
TEL 0865-42-3111 FAX 0865-42-4419
E-mail w-master@konkokyo.or.jp
URL http://www.konkokyo.or.jp/